

ミズナ（高原雨よけ）

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
春・秋	○ ——— / ○ ——— / ○ ——— / ○ ——— /											
夏												
主な作業					は	収	は	収	は	収	は	収
					種	穫	種	穫	種	穫	種	穫

ミズナ アブラナ科、原産地：京都

作物名 ミズナ

学名 Brassica campestris L.

作型 高原雨よけ

技術体系

1 作型の特徴

平坦地の栽培が高温で難しくなる時期に、高冷地の冷涼な気候を利用して栽培する作型である。

長日条件で分化した花芽がさらに生育し、抽苔します。春から夏にかけて日長が長くなる時期は、抽苔が起こりやすい。

2 適応地域

標高400m以上の高原地域

3 栽培条件

(1) 温度

生育適温は15～25℃である。25℃以上では軟弱徒長し、株張りが悪く、15℃以下では葉の伸長が緩慢になる。

厳寒期栽培では、13℃以下の低温にある一定期間あうと花芽分化し、その後の高温・長日条件で分化した花芽がさらに生育し、抽苔する。

(2) 土壌条件

排水性と保水性のよい、バランスのとれた圃場が適している。また、根こぶ病などの連作障害を回避するため、できるだけアブラナ科野菜を前作に作付けしていない圃場を選定する。

よい圃場を維持するには、化成肥料のみでの栽培は避け、完熟堆肥などの有機物を施用し、良質の土づくりを心掛ける。

4 施設整備

単棟ハウス、灌水施設

5 経営目標

(1) 収量 500kg/10a/1作

(2) 投下労働時間 720時間/10a

(3) 所得率 50%

(4) 経営規模 のべ80a
(施設面積) (80a)

(家族労働力2人の場合)

栽培技術

1 品種と特性

「京みぞれ」

小株どりに適し、周年栽培が可能な早生種である。生育が旺盛で葉軸は純白で細く品質がよい。食感がよく、またアクが少ないのでサラダなど料理の用途が広い。

2 施肥基準量

施肥量は、作土のpH・ECを測定して決定し、肥料の過剰な施用をさける。2作目以降は、土壌分析により調整する。

施肥量例（成分）

	基 肥（10a当たり成分kg）			
	1作目	2作目	3作目	4作目
N	20.8	10	0~1	0~5
K ₂ O ₅	20.8	15	0~15	0~5
K ₂ O	13	10	0~10	0~5

3 播種・灌水

小株どりでは、作業の手間を省略するため、直播き（1粒播き）で間引きなしの栽培を行うのが一般的です。

栽植密度は、株間は5cm～7cm、条間15～20cmが標準的である。高温期の栽培では軟弱徒長を防ぐため、株間をやや広めにとる。

播種後はタネが隠れる程度に軽く覆土し、ムラなく均一に灌水する。

他の軟弱野菜と同様、収穫・調製作業に多くの時間がかかる上、出荷可能期間が短いので、1日当たりの出荷数に合わせて、計画的に播種を行う。

小株どりでは短期間で収穫を迎えるので、一斉発芽が栽培を安定させるポイントである。特に高温期は発芽が不揃いになりがちである。乾燥条件ではもちろんであるが、過湿でも発芽前にタネが腐敗して欠株になったり、また、発芽しても根張りが悪く生育が順調に進まない。特に乾燥しやすい高温期の栽培では、十分圃場に水分をもたせた上で播種する。

また夏どり栽培では水分管理を容易にするため雨よけハウス栽培を基本とするが、播種前に遮光資材を展張し、地温・気温の上昇を抑えるとともに土壌水分の変化を少なくすることで、灌水管理を容易にする。子葉が展開して発芽が揃った後には遮光資材をはずし、軟弱徒長を防止する。

6 病害対策

ミズナを食害する害虫は、コナガ、ヨトウムシ、キスジノミハムシ、ハモグリバエ、アブラムシなどである。ミズナは登録農薬が少ないので、防虫ネットなどを利用し耕種的防除に努める。

また、粒剤を播種前に土壌混和すると害虫の発生予防に高い効果を示す。

べと病対策では株間を広げ、風通しをよくして、加湿にならないようにするとともに窒素過多にならないように土壌分析を必ず実施する。

7 収穫

出荷規格に合わせた適期収穫をするが、生育日数の目安は、春まきで約40日程度、高温期で約25

日程度である。

収穫は草丈23cm以上になったら、午前中の露がとれてから行う。収穫したものは茎や葉などを傷めないようにし、根元をはさみ等で2度切りする。

茎や葉などに奇形、病害虫などが無いことを確認し、出荷規格に基づいて選別し袋詰めをする。鮮度を最大条件とするので、陽の当たらない涼しい場所に保管し、その日のうちに出荷する。